今、凍てつく被災者に暖かさを

―笑いあり涙あり「寅さん」楽しむ、被災地7日間ほっと映画会とその引き継ぎのなかから―

2012年1月9日　すわこ文化村代表理事　毛　利　正　道

ドキュメント7日間

―「男はつらいよ」は、昭和44年から平成7年までの26年間に48作も造られました。今回も登場する私の大好きなリリー＝浅丘ルリ子が登場するものは4作ありますが、最後になった48作目で二人はだれの目から見ても結ばれて終わります。渥美清さんは、この最後の寅さんを撮るときは、自宅から撮影所まで通うこともままならないほど弱っており、取り終えたあと、まもなく亡くなります。文字通り、笑いと涙と拍手で、多くの国民を励まし続けたんですね。私は昨年、リリー3部作を見て、誰もが他の人のことを本気になって心配するその姿が、繋がりが薄れている今、とっても新鮮に感じられ、ほとんど涙を流しっぱなしでした。それで、大震災に見舞われ厳しい冬を迎える皆さんからもこの映画を観てほんの少しでも暖まっていただければという思いで、長野から来ました。

こんなご挨拶を、上映前と上映後にするところから「寅さん」映画会での話し合いが始まります。すると、

- 私も大好きでTVから48作すべて録画してビデオに採って持っていたけど、津波で家とともに流されてしまいました
- 48作目の「紅の花」は見ましたが、リリーとのなれそめを見ていなかったので、今日見れてよかったです
- 寅さんは、見知らぬ同士が隣の席で泣き笑いして、映画館を出るときには声を掛け合うような映画ですね
- TVで48作すべて見ましたよ
- 久しぶりに寅さんの映画見れてよかった

というようなお話がぽんぽん出てきます。そして、そのようななかから･･･

30数戸の仮設団地で

- 私は、迫ってくる津波からようやく高台に逃げたが、知り合いを亡くしている。いまでも、津波に襲われたときの夢を見て、はっと目が覚めて、どちらが現実だろうと思うときもある。今も海を見ると苦しくなるので、なるべく見ないようにしている。でも、バスに乗ったときに目に入ると、今も

津波が押し寄せて来ていないかと、海を見てしまう。
なるべく海を見たくないので、海から離れたここに申し込んだ。
・ここは、あちこちから来ているし規模も小さい、社協もボランティアもほとんど来ない。取り残されている。人と話したいと思うけど、そういう機会が少ないし、あっても、いつも同じ顔3～4人が集まるだけ。一人でいると悪いことばかり考える。私も、住宅ローンを抱えている。話を聞いてもらえるのが嬉しい。こういう機会があればよい。大きいところの方が、物資も一度にたくさんはけるので、そちらにいってしまいやすいということがないんですかね。ここは、自治会もまだできていない。長くても3年なので、おつきあい要らないと思っているのか。震災後、別の仕事についているが給料が減って生活が大変。義捐金には手がつけられない。
・原発が大変なことは良く分るが、自分たちが置き去りにされている感じがする。
・テレビで津波の映像を見るのがつらい。学生さんから津波時のことを聞かれるが、思い出すのがつらい。夜眠れなくなる。だいぶ時間が経ったので、もう大丈夫かと思って、年末のテレビ番組をみたら、やはり気分悪くなって眠れなかった。
・何か今ほしいものがありますか
　　みそとしょうゆ、　お米、　暖かい布団セット、　軽い毛布
・バスで買い物に行くのが大変。被災者だけでも、現在釜石全市で特例として行われている料金１００円制を、被災者だけでも続けてほしい。

海沿いの仮設で
・８０才のわかめ養殖自営業者
ここのわかめは3メートルになる品質よいもの　鳴門わかめは数十cmにしかならない。一人ひとり自営だったが、そう復旧するには５００万円かかる。今は、共同で養殖を始めていて、4月には初出荷できる。
・亡くなったのはこの漁村では一人だけだが、大槌・陸前高田などでたくさんの大切な人を失った人はここにも多い。
・この地域は、家を流された人はみなここに立てられた仮設に入っている。互いに元気な姿をみるだけで癒しになる。
・多くのいえが流され仮設に入った。自分の家は流されなかったので、隣近所がなくなり、さみしくなった。
・ここだけ、畳も入らず、玄関先の風除室もついていない。結露が酷く、寒かった今朝は、玄関のドアが凍り付いて開かなくなった。年末までには施工するとの市の返答だったが、もう無理だ。

他の仮設で
・２００戸ほどの大規模仮設で　（ここの集会所はびっくりするほど小さい）
　　観客みんなのためにみかんをたくさん持ってきた男性
　　ここは、つきあいがない、こまったものだ
・４００戸ほどの大規模仮設で
　　ここは、いろいろ催しがあるけど、（全体のなかでは）参加する人は少ない
・５０戸ほどの仮設で
　　ここは、入居者同士の集まりや外から来て下さる方の企画などたくさんあって、

集会所がいつもいつも使われていますよ

響き合ったこころと心

初回の時に、「いい映画をありがとうございました」と言いながら深々と頭を下げられること三度に及んだ年配のご婦人から、映画会が終わるときに小声で「夫と兄が今も分らない（行方不明）んですよ」と告げられました。この姿に接して一人軽自動車に上映機材を山積みにして12時間かけて来て本当によかったと思いました。以来、10名も入れば満杯になるような仮設の集会所で、延べ112名の皆さんに映画をみていただき、いろいろな交流もありました。終映後の話し合いが1時間前後に及んだ仮設が5箇所も。そして、7日間ほとんどどこでも、映画の「終わり」で大きな暖かい拍手がおきます。観客の心同士が共鳴し合っているようでとってもいいものですね。河北新報は、社会面で、笑いあり涙あり「寅さん」楽しむ、と報じました。私にとっては、初回のご婦人の姿と最終日に観に来てくれた小学生の女の子が「私は大槌小学校にいて助かったけど、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが、行方が分らないんです」と話していたのがとりわけ印象に残っています。見た人がお家に帰って、「寅さん見てとってもよかったよ」と話していただければ、それだけでもその場が暖かくなるでしょう。そうでなくても、10箇所の仮設で戸毎に配付された、「長野県諏訪湖畔から来ました。大スクリーンの映画で少し暖まりませんか」と呼びかける1400枚の映画会チラシを見ただけの人のなかにも、遠く長野県から自分たちの冷えた心を暖めにきてくれる人がいるのだと暖かく受けとめてもらえる人もいたことでしょう。終始同行してくれた25才の深沢さんが、「映画を見た人の口が軽くなっていた、楽しそうに笑いながら見ていた、喜んでくれている場に立ち会うことができて嬉しかった」と感想を述べていました。

往復2日含め9日間の旅でしたが、なによりもこの映画会で心が温まった方々がかなりおいでになったこと、それ自体が最も嬉しいことでした。そして、なかには、この映画会をきっかけに始めて言葉を交わされた方々もあったように思います。このこともありがたいことでした。そして、この企画は、趣旨に共鳴していただいた（株）松竹からＤＶＤの提供を受けて始めて実現したものであることをここにあらためてご紹介し、心からのお礼に代える次第です。

なにより嬉しい「跡継ぎ」の誕生

そうはいいましても、私が上映会を行った釜石市と大槌町では、合わせて人口56，000名のうち2368名（うち中学生以下の子ども41名）の死者・行方不明者が出ています。とりわけ、町の中心部が壊滅的被害を受け、町長も死亡した大槌町では、町内全家屋の60％が被災し、100名のうち13名が死亡・行方不明となるという、東北のなかでも著しく甚大な被害を受けました。その両自治体での仮設住宅は計5，188世帯、大切な多くの方々を亡くした1万人を超える住民が90箇所の仮設住宅団地で暮らしています（日本全国では、33万人が避難生活をされています）。しかも、被災地に来てみてある意味驚いたのは、従来のコミュニティに接近してその地域の住宅被災住民が入居している仮設団地があるのは漁村などごく一部で、ほとんどの仮設団地は従来のコミュニティとは全く無関係に入居者が決められているのです。大切な人・住居・仕事を一挙に失った被災者が、深い深い喪失感を抱いたまま、しかもコミュニティを失ったまま仮設暮らしが始まったのです。今回の上映会は、そのなかのわずか12箇所で112名から観てもらっただけ。な

んとかできないものかと、釜石市市役所を表敬訪問して総務企画部長にお会いし、ぜひこのような上映会が地元でできるように尽力してほしいと申入れ、かつ、急遽記者レクも行ってこのような取り組みが広く行われるようにとアピールしました（その一つの成果が、河北新報社会面での記事ー笑いあり涙あり「寅さん」楽しむーではありましたが）。

しかし、それだけでは間に合わない、被災者の心が厳寒のなか、大切な人々の命日を迎えるこの冬に凍り付いてしまうのではないか、せめて残り80箇所の仮設で上映できないものか、と年末ギリギリ29日に思い悩み、すわこ文化村75名の村民と広くWebで募金をお願いして上映機材を一式購入し、ずっと行動をともにしてくれていた深沢寿人さん（25才）から「文化村釜石出張所」として今後も現地で上映会を実施してもらうというアイデアがふっと浮かび、深沢さんに水を向けて「そうしてもらえればやりますよ。寅さんの映画、面白いですね。ぜひ、やりたい」との答え。そこで、31日に自宅に帰ってすぐ準備を始めて元日のうちに、「迎春　お願い」と題する募金の全国に一斉にお送りしました。

深沢寿人さんと

これは、もともと、年末の被災地上映会を実施するについて募金をお願いしたところ、16名から129，000円が寄せられていたことに支えられた発想であったことは確かですが、それにしても全国40名から50万円を超える寄付の申出があったのです。そこには、「いろいろ無力感に捕われるなか、毛利さんを見習って自分ができることをしたい」「現地の方たちのこころの緊張がほっと緩む場となったに違いありません。ありがたいと思いました」「私も山田洋次さんの映画が大好きです。この企画に胸が熱くなりました」などの励ましがたくさん添えられていて、胸が熱くなりました。

そこで、早速、プロジェクター・DVDプレーヤー・音響設備・スクリーンを各一式Webで購入し、合わせて松竹から提供を受けたDVDソフトを深沢さんに送りました。深沢さんは、地元釜石市でスタンドマンをしていたのですが、震災後の4月から救援ボランティアに取り組み始め、被災者への物資の提供や青空市などで大奮闘している好青年です。私が、息子が震災ボランティアで行って知り合った彼に電話で現地映画会のノウハウを聞いたところ、「いい企画ですね。寂しい思いをしている被災者がこの映画会をきっかけに少しでも繋がれればいいですね、全面的に応援しますよ」との答え。14箇所の時間場所全て、現地仮設団地の責任者と打ち合わせて決めていただき、その情報を刷り込んだチラシが長野から現地に届くや、私が着く前に前半6箇所の仮設団地全戸にチラシを配ってくれもしました。そのうえ、7日間すべて行動をともにしていただき、集会所の

鍵の借り出し返却などもスムーズにやっていただきました。その彼に、引き継いでいただけることになったのですから、もう本当に嬉しい限りです。

●東北被災地で上映活動を実施していただける方へ

上映用機材一式（17万円）を、当面1組、更に追加して贈呈できるよう尽力します

●そのための上映機材購入費募金をしていただける方へ

❤以上、いずれかの方は、毛利 mouri-m@joy.ocn.ne.jp までご連絡下さい。

今、被災者の心を暖めるために

仮設住宅の建設が始まった段階で、阪神淡路大震災やこれに学んだ新潟＝山古志村の教訓を踏まえて、できるだけ従来のコミュニティを引き継ぐ仮設住宅を造ろうとの声が高まったのですが、現実は甘くありませんでした。従来のコミュニティを引き継ぐ仮設ができている釜石市漁村地区の住民が、「特に話さなくても、（近くの人々の）元気な姿を見ているだけで癒しになる」とはっきり述べていたことが引き立ちます。このような重い現実のなかで、今、被災者の心を暖めるにはなにが必要なのでしょうか。

大槌町中心部の現状（2011年年末）

生業の確保　同じ寅さん映画会の場で、一方で震災後の転職で月収が大きく減った女性がトラウマ・喪失感を抱き、他方、わかめ養殖が共同で始まった地区で明るい声が交わされている。このコントラストは明確です。生業の確保、公営住宅の建設など、仮設団地の住民が明るい希望を抱けるようにハード面を格段のスピード感を持って確立するために国あげて尽力することが決定的に大切であること、疑いありません。

仮設住宅の整備　厳寒の東北で、風除室や畳がないなどあり得ないことです。どんなに暖房しても寒くて凍えそう、との声も聞きます。一つあいだをおいた、隣の隣の部屋の物音が聞こえる、隣家のいびきで眠れない、という「騒音被害」もかなりのものです。どこかの知事が仮設で一泊してみたそうですが、ぜひ1週間ほど過ごしてみてほしいものです。

集会所の整備　200戸近い大規模仮設団地で、団地内1住家の間取り程度しかない極めて狭い集会所しかないところがありました。経過はいろいろあったようですが、現実は、これでは、使うなと言っているようなものです。ここに限らず、全体として集会所が狭いという実感です。今後、どこでももう一つ集会所を造らせるようにしてはいかがでしょうか。また、440戸を抱

えるマンモス仮設にだけ、すごくりっぱな「サポートセンター」がありました。集会所の一つではあるのですが、ものすごく広くて、住民の入浴、お手製の昼弁当の提供、トレーニングマシン、カラオケセット、広い子どもルーム、生活相談室などがあり、数名の常勤スタッフのもと、ほとんど毎日のようにセンターやボランティア主催の企画が組まれているのです。なぜ、ここだけりっぱなの、との疑問を抱くほどでした。ほかの仮設団地でも集会所とその設備の拡充を図るべきです。どの集会所にも、備え付けの上映機材が設置されるといいですね。

大槌町の仮設住宅

ここだけりっぱな「サポートセンター」

集会所の管理運営　同じ小規模仮設のなかでも、集会所にいろいろなものが置いてあったり、実際に住民やボランティアがいつも使っていたりするところでは、映画会に集まってきた住民同士で映画の前から声が交わされることが多かったです。雰囲気が暖かい。そんなところは、決まって、お世話焼きの自治会役員がいるのです。そんなところは、深夜以外は集会所に施錠する必要ありませんね。他方、条件が似ていると思われる小規模仮設でも、自治会もできていないところでは、なんと、ずっと使っていないらしく集会所のトイレが凍結していて使えないのです。住民自身が立ち上がるしかないのですが、行政もこれをサポートしてほしいものです。

実は、問題は、大規模仮設のほうがうんと大きい。いろいろな企画があって、参加者数もまずまずのように見えても、集会所の催しに一切参加しない人々がたあーくさんいるのです。実際、大規模仮設のほうが映画会の参加者がずっと少なかった。そこでみかんを全員分持って映画を観に来た高齢の男性が、「ここは、つきあいがない、こまったものだ」と言っていましたが、まるで他の人に顔を覚えられるのを嫌がってでもいるのかとも思いたくなります。それが現実なのです。東京砂漠、という言葉を思い出しました。

物資は足りているのか　だれでも同じものがほしい、という状況ではおかげさまでなくなったようです。それではもう無償提供する必要がないのかというと、深沢さんは言います。「収入が落ち込んでいるので、お米、みそ、醤油、毛布など生活に必要な物を買えないでいる人が多い。一人ひとりの要望をこまめに聞いて、それに応えるようにすることが必要」と。となると、①アンケート用紙の配付かご用聞き、②その回収・集約、③物資を個別に探すか提供してもらう、④物資を戸別に届ける。これを、平均片道30分以上かかる90箇所の仮設団地一つひとつにその都度行って行わなければならないのです。深沢さんは、「僕はがんばる」と言いますが、動けるスタッフがもっともっともっと必要です。

住民の心をつなぎ暖める　心が凍り付くようなこの冬、とりわけ緊急に必要なことです。私は、自

治体が音頭を取って、松竹と提携し、被災地のすべての仮設団地で、ここころと心を繋ぐチカラを持つ、寅さん始め山田洋次さん監督映画を上映してほしいと思います。むろん、文化的技量を持つ人は、もっと被災地に入りましょう。でも、1セット17万円で上映機材が用意できるのであれば、文化的技量がなくても心さえあれば上映できるのです。行政待ちにならずに、自身でできることを懸命にやりつつ、国・県・市町村・各級議員にも働きかけましょう。

原発被害と津波被害

映画会に来られた中年のご婦人が、「原発（被害）が大変なことは良く分るが、津波（被害）のことはテレビでもあまり取り上げられない。自分たちが置き去りにされている、忘れられている感じがする」と語った場面をくっきりと覚えています。こういうことなのです。今生存されている津波被災者は、ご自身が襲ってくる津波から必死の思いで生き延びたとか、大切な人を目の前で、あるいは「自分のせいで」死なせてしまったという体験を多くのかたがお持ちです。映画会の場に居合わせた女性3人とも、深いトラウマをお持ちでした。そしてさらに、2万人が亡くなったということは、その亡くなった人＝妻子・身内・友人などを我が事のように大切に思う10万人から20万人の方が、大きな精神的経済的な打撃を受けたまま現在生きている、現在生きている被災者とはそのような満身創痍の打撃を受けた存在であり、従って、同胞全員で支えるように最も尽力すべき存在なのです。少なくとも、原発被害に対する関心と行動と同程度のチカラを津波被災者にも傾注してほしい、と彼女は言いたかったのだと思います。大震災から間もない頃、「津波被害からはなんとか立ち直れるが、原発はそうはいかない」という発言もありましたが、気をつけて発言しなければいけない、とも思いました（ただし、福島県では、大震災で約2，000名が死亡・行方不明、全半壊被災13，000戸の被害を受けており、現時点では放射能被害からの避難者を含め、全国33万人避難生活者のうち福島県民が15万人を占めています。避難していなくても多くの県民が放射能被害に苛まされています。そして、県内の仮設住宅に13，000戸、31，000名が入居している現実があり、研究者による避難住民への最新の実態調査報告で「避難者は孤立を深めている。避難先の生活再建や支援の体制も必要だ」と指摘されていることも事実です。私自身は、できれば次は、福島県内の仮設団地での映画会をと考え始めています）。